

近江毛野臣と近江臣氏

紅林 怜

はじめに

近江毛野臣は、『日本書紀』（継体紀）によれば継体天皇に仕えた人物であり、朝鮮半島へ渡っていわゆる任那経営に関わったとされている。毛野の任那での動向や、死とその遺体の運送等について、継体紀にはかなりの文量の記事がある。毛野に関する一連の記事を継体紀にしたがって要約すると以下のようになる（二）。

継体紀二十一年六月条が、毛野の初出である。この時毛野は、新羅の侵略を受けていた任那を援助すべく派遣された六万という大軍団の長であった。しかし、北九州を基盤とする筑紫君磐井が、新羅からの賄賂を受けこれを遮る。いわゆる磐井の乱である。この時、磐井の鎮圧には中央から物部麤鹿火大連が派遣されており、乱の間の毛野の動きについては何も記事がない。磐井の乱鎮圧後の継体二十三年三月には朝鮮半島の安羅に渡り、新羅との交渉など、任那経営を開始するが、翌二十四年までに、新羅や百済の恨みを買うばかりか、現地の任那使から継体へ悪政を報告されるに

及ぶ。そのため任那からの召還が命じられるが、はじめはそれを無視する。再度の召還により同年帰国の途に就くが、対馬にて死去。遺体が近江へと送られているのを見て、毛野の妻が歌を詠んだ。

これだけの記述があるにも関わらず、毛野の任命の理由や、出自、その前後の一族の動向などについてはほとんど記述がない。継体朝の一連の任那経営の後半期における、現地長官のような存在という大任から考えれば、毛野は弱小の氏族出身であったとは考えにくい。なにゆえ毛野はこの大任に就いたのか。このことを論ずるには、毛野自身の継体朝における扱いだけでなく、毛野の後裔と考えられる近江臣氏についても検討が必要と考えられる。

毛野自身について詳論した研究は多くないが、山田郁郎は継体紀の記事を検討し、およそ次のように述べている。継体元年正月条に継体は即位の際に河内馬飼首荒籠と私的な関係があったとあること、また二十三年四月条に近江毛野臣が河内馬飼首御狩を従者としていることをあげ「継体も毛野臣も河内馬飼首と私的な関係のまま外交を展開している」とし、さらに毛野の出

兵の際には詔勅が出されておらず、磐井の乱の鎮圧の際には物部麿鹿火大連に詔が出されていることから、毛野の派兵は「個人的裁量のように」に考えられるとし、二十四年九月条の最初の召還は無視までしていることから、「踏み込んで考えると近江毛野臣と男大迹大王は同族そのもののように見える」としている〔山田一九九一 六〇～六一〕。近江毛野臣が通常と違う扱いを受けていることを重視した見解であるといえよう。

山田氏以降、毛野に本格的に触れている論文はほとんどみられない。そこで本論では、改めて近江毛野臣と近江臣氏や近江の地域の国造との関係、また近江臣氏がどのような氏族で、どこを本拠地としたのかという点について考えていきたい。

一 近江臣氏との関係

毛野は継体紀における「近江毛野臣」の表記によれば、のちの近江臣氏の人物と見るのが自然な解釈といえよう。そこでまず、史料にみえる近江臣氏の系譜か

ら、毛野とのつながりを見出せるかみてみたい。（史料中の傍線は、すべて筆者によるものである。）

【史料1】『古事記』孝元天皇段

此建内宿禰之子、并九（男七女二）、波多八代宿禰者、（波多臣・林臣・波美臣・星川臣・淡海臣・長谷部君之祖也。）（後略）

ここにみえる「淡海臣」が、「近江臣」と同一であることはいうまでもないのである。これによれば、近江臣氏は建内宿禰後裔氏族の一つで、建内宿禰の子の波多八代宿禰を祖とする。また波多八代宿禰は『日本書紀』には羽田矢代宿禰につくり、応神三年是歳条に次のようにみえる。

【史料2】『日本書紀』応神三年是歳条

是歳、百濟辰斯王立之失_二礼於貴国天皇_一。故遣_二紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰_一、噴_二讓其无_レ礼状_一。由_レ是、百濟国殺_二辰斯王_一以謝之。紀角宿禰等、便立_二阿花_一為_レ王而帰。

これによれば、羽田矢代宿禰（波多八代宿禰）は、同じく建内宿禰の子である紀角宿禰・石川宿禰・木菟宿禰らとともに百済に渡り、当時の辰斯王の無礼を責めたとある。

これらの史料を勘案すると、近江臣の祖とされる波多八代宿禰も対外的・軍事的な活動を任としているといえ、近江毛野臣との共通性が指摘できる。

次に、『日本書紀』において、毛野以外に「近江臣」を冠する人物は二名みえるが、それらの人物についてみたい。

【史料3】

A 『日本書紀』崇峻二年秋七月壬辰条

遣^三近江臣満於東山道使、觀^二蝦夷国境^一。遣^二穴人臣鴈於東海道使、觀^二東方浜^レ海諸国境^一。遣^二阿倍臣於北陸道使、觀^二越等諸国境^一。

B 『日本書紀』推古三十一年是歲条

（前略）仍貢^二兩國之調^一。然磐金等、末^レ及^二于還^一。即年、以^二大德境部臣雄摩侶・小德中臣連國^一為^二大將軍^一。以^二小德河邊臣禰受・小德物部依網連乙等^一。

小德波多臣廣庭・小德近江脚身臣飯蓋・小德平群臣宇志・小德大伴連（闕^レ名）・小德大宅臣軍^一為^二副將軍^一。率^二数万衆^一、以征^二討新羅^一。

Aは近江臣満（写本によっては蒲とも）が、崇峻二年七月条の国境視察において、東山道の蝦夷との国境の視察に派遣されたという記事である。この視察についての詳細は不明であるが、国境の向こう側にいるのが蝦夷ということを考えると、満の任命の理由には対外的・軍事的要素を含んでいると推定されよう。

Bは推古朝における新羅征討計画において、近江脚身臣飯蓋が征新羅副將軍に任命されたという記事である。こちらも当然対外的・軍事的要素に基づいての任命であろう。二人の任命をみるに、近江毛野臣と同様の要素を持っていたことが指摘できる。飯蓋とともに副將軍に任命された波多臣廣庭も近江臣と同じく波多矢代宿禰を祖とする氏族であることも参考になる。

近江毛野臣は、近江臣氏の祖とされる波多矢代宿禰や、近江臣氏の人物である近江臣満・近江脚身臣飯蓋と共通の性格が認められるのであり、この点からも、

のちの近江臣氏の人物であつたとみるのが妥当といふであらう。

なお、ここで断つておかねばならないのが、『新撰姓氏録』にみえる淡海真人氏・淡海朝臣氏についてである。

【史料4】『新撰姓氏録』左京皇別

A 淡海真人 出自^レ自^二謚天智皇子大友王^一也。続日本紀合。

B 淡海朝臣 春原朝臣同祖。河島親王後也。

Aに「続日本紀合」とあるのは、次の記事を示している。

【史料5】『続日本紀』天平勝宝三年正月辛亥条

賜^三正五位下大井王奈良真人姓。(中略) 无位御船王淡海真人。(中略) 常陸王志紀真人^一。

淡海真人御船は大友皇子の子の葛野王の孫であるから、この記事はAの系譜とまさしく一致する。Bの淡

海朝臣は、大友皇子の異母弟の河島親王(川嶋皇子)を祖としている。これらの淡海真人・淡海朝臣氏が、波多八代宿禰を祖とする淡海臣(近江臣)氏と別氏族であることは明らかであらう。また、近江臣氏の人物は、推古朝以降は史上にみえないが、おそらくそのことは、近江臣氏が没落していったことを語るものであり、天平勝宝三年に御船王に淡海真人という氏姓が下賜されていることも、その時にはすでに近江臣氏が存在していなかったことを示している。

二 近江地域の国造

近江臣氏については、近江(近淡海)国造であつたとする説がある〔岡田 一九七八 二七〇二九・西田 一九九九 一七一〇一八三〕。近江という国名をウヂ名に持っていること、近江毛野臣が大軍を率いて任那経営にあたっていることなどからすれば、近江臣氏を近淡海国造とする見解が示されるのも尤もなことではある。しかし、近江地域の国造の系譜は、いずれも近江臣氏の系譜とは一致しない。近江地域の国造の系譜

は次のとおりである。

【史料6】

A 『古事記』 孝昭天皇段

兄天押帶日子命者。〈春日臣・大宅臣・粟田臣・小野臣・柿本臣・壹比韋臣・大坂臣・阿那臣・多紀臣・羽栗臣・知多臣・牟邪臣・都怒山臣・伊勢飯高君・壹師君・近淡海国造之祖也。〉

B 『古事記』 景行天皇段

此倭建命、(中略)又、娶近淡海之安国造之祖、意富多牟和氣之女、布多遲比売、生御子、稻依別王。〈一柱。〉

C 『先代旧事本紀』 「国造本紀」 淡海国造条

淡海国造。志賀高穴穗朝御世、彦坐王三世孫大陀牟夜別定賜国造。

Aの「近淡海国造」については、その系譜に示されるとおり和邇氏系の一族であり、近江地域の和邇氏系の分布などから、のちの近江国滋賀郡を本拠とした一族とみられている〔大橋 一九九二 一〇四〕一二

六〕。

Bの「近淡海之安国造」については、そこに祖とある「意富多牟和氣」とCの「大陀牟夜別」とを同一の人物とみてよく、Cの「淡海国造」と同一の国造と考えられる。『古事記』開化天皇段には、彦坐王の子の水穗真若王の注に「近淡海之安直之祖」とあり、近淡海之安国造の氏姓は安直であることが知られるが、この系譜は、まさしくCの「淡海国造」の系譜に一致する。そしてこの国造の本拠地は、同じく「ヤス」と読む、のちの近江国野洲郡とみて間違いないであろう。

近江臣氏をAの近淡海国造とする岡田精司は、波多八代宿禰を祖とする近江臣氏がのちに系譜を和邇氏系に改編したとするが〔岡田 一九七八 二八〕、すでに指摘があるとおおり、同じ『古事記』の系譜記事に別氏として載せられている氏を同氏とするのは困難であろう〔大橋 一九九二 一二〇・加藤 二〇一三 六六〕。近江臣氏は近淡海国造とは別氏とみるべきであり、B・Cの安国造(安直氏)・淡海国造とも別氏とみてよいであろう。記紀によれば彦坐王は和邇氏の女性を母とする伝えており、AとB・Cとの系譜上の接

点は見出せるが、それらの国造と近江臣氏との系譜上の関係はみとめられない。

近江毛野臣が一代に限りのちの近江国造に相当する地位に就いた可能性はあるかもしれないが、その後しばらく近江臣氏の人物は史上に登場しない。それは毛野臣が任那経営に失敗した結果と推定されるが、その後、崇峻朝・推古朝に登場する近江臣満・近江脚身臣飯蓋が国造であった徴候はない。近江臣氏の人物が近江国造に任じられたことはなかったとみてよいであろう。

三 近江臣氏の本拠地

次に、近江臣氏の本拠地について考えたい。岡田精司はのちの滋賀郡南部の地域に当てたが〔岡田 一九七八 二五〕、それは近江臣氏を近淡海国造と氏と考えたからであり、近江臣氏と近淡海国造の関係を否定した場合、改めて考えなければならない。また大橋信弥は、近江臣氏と近淡海国造を別氏とはするが、滋賀漢人と蘇我氏との関係を重視し、蘇我氏と同系の氏

族系譜を称する近江臣氏の本拠地については、岡田と同じく滋賀郡南部に求めている〔大橋 一九九二 一二〇〕。これに対して山尾幸久は、最近の著書でその本拠を野洲地域としている〔山尾 二〇一六 一五八〕。しかし、それらの地域はそれぞれ近淡海国造・安国造の本拠地であり、近江臣氏の本拠地は別に求めるのが妥当であろう。

そこで筆者は、推古紀三十一年是歳条に登場する近江脚身臣飯蓋の「脚身」に注目したい。「脚身」は「アナム」読まれるのが普通であるが、『日本書紀』には訓注は付かず、「アナム」の読みが絶対とはいえないであろう。脚を「ア」、身は身狭のように「ム」と読んで「アのム」から「アナム」の読みが生じたと考えられるが^(二)、国史大系本を見る限りでも「アシ」、「アナム」、「アム」など複数の訓が付されており、読み方は定まっていない。

一方、近江の地名に目を向けると、『延喜式』神名帳に高島郡に阿志都弥神社がみえる。また『和名抄』には高島郡に善積郷がみえるが、この善積（ヨシツミ）が元々の名称のアシツミからの改称であることは、平

城宮木簡に「足積里」とみえること^(三)や、正倉院文書所収の「天平宝字六年 近江国符案」に葦積郷とみえること^(四)から明らかである。この改称はおそらく好字に関わることと思われる。

筆者は、この「アシツミ」が「脚身」ではないかと考えている。このことはすでに指摘のあるところであるが〔高島郡誌 一九七二 三三一・加藤 二〇一三六七〕、このことを理由に近江臣氏の本拠地を善積郷の地域に考えることについては疑問も出されている。〔西田 一九九九 二二六～二二九〕。しかしこの疑問は、善積郷の地域性をみることによって解消されるであらう。

善積郷は、現在の高島市今津町付近に比定されるが、石田川を挟んでその北が角野郷となり、南に接する木津郷は饗庭丘陵と琵琶湖が一番近づくあたり一帯で、そのさらに南が三尾郷となる。この地域は、現在も今津として名が残るが、古くから南の天津、北の海津や塩津を結ぶ中間地点の津として、琵琶湖西岸地域の交通の要衝であったと考えられる。饗庭の沿岸部の木津は、元々「こうづ」古津」だったという指摘もあ

る〔中江 一九八四 二二三〕。つまり近江臣氏は、この善積・木津を含む地域を本拠地とし、湖西の水上交通を掌握した氏族であったと考えられるのである。このことは、対外遠征に近江毛野臣が拔擢されたこととも符合する。

また、善積・木津郷に隣接して三尾郷が存在することにも注意される。三尾の地は、継体即位前紀によれば、継体の父の彦主人王が越前から母の振媛を「近江国高島郡三尾之別業」に迎えて継体が生まれたとされる地であり、『釈日本紀』所引の『上宮記』一云にも同様の伝えがみえ、そこには「弥乎国高島宮」とある。さらに、記紀によれば、継体の最初の妻と考えられるのも三尾の地の女性である。この地が即位前の継体と深い関係にあったことは間違いないであらう。「はじめに」でも述べたが、継体紀の記事からは、山田郁郎の指摘のとおり、近江毛野臣と継体が私的関係にあったことが推定されるのであり、近江臣氏の本拠地をこの地域に考えることは、この点ともうまく符合するといえよう。

おわりに

以上、近江毛野臣の出身地を近江臣氏の本拠地と考
え、それをのちの高島郡善積郷・木津郷一帯の地域と
する試論を提示した。毛野臣と継体との関係を具体的
にどう考えるかという問題や、考古資料の検討など、
論じ残した問題は多いが、それらについては今後の課
題としたい。

註

- (一) 継体紀二十一年六月条、同二十三年三月是月条、同二十三年四
月是月条、同二十四年九月条、同二十四年十月条、同二十四年
是歳条。
- (二) この読みについては、石和田秀幸氏のご教示を得た。
- (三) 『平城宮発掘調査出土木簡概報』二十七号 奈良国立文化財研
究所編 一九九三年。
- (四) 『正倉院文書続々修一八帙』（『大日本古文書』編年十五卷 東
京大学史料編纂所）。

参考文献

- 岡田精司 「滋賀の古代豪族」〔『新修大津市史』第一卷 大津市
一九七八年〕
- 大橋信弥 「近江における和邇氏の勢力―小野臣・都怒山君・近淡
海国造―」（水野正好編『古代を考える 近江』吉川弘文
館 一九九二年）
- 加藤謙吉 『ワニ氏の研究』雄山閣、二〇一三年
- 黒板勝美編 『日本書紀』後編 吉川弘文館 一九八六年
- 高島郡教育委員会編 『高島郡誌』一九七二年
- 中江 彰 「郷と条里制」『安曇川町史』安曇川町 一九八四年
- 西田 弘 「近江の古代氏族」真陽社 一九九九年
- 山尾幸久 『古代の近江 史的探究』サンライズ出版 二〇一六年
- 山田郁郎 『湖北の神々Ⅱ 水沼三女神の受難』史伝舎 一九九一
年